
怪盗と私

ふとん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

怪盗と私

【Nコード】

N8276K

【作者名】

ふとん

【あらすじ】

神様は、きっと私がお嫌いなのでしょう。

でもね。だからってね。いきなりさらわれるとかありえないと思うの！

夏の暑い盛り。涼み入った銀行で私の手を取ったのは——銀行強盗！？

ここから、私の新しい人生が唐突に始まってしまった——。

人生最高の悪夢

その日は暑かった。

確かに暑かった。

だから、その銀行に入ったとき、都会の熱波から開放されてマリ
アが少し幸せになったことを誰も責める人はいないだろう。

そして、

「動かないで」

耳元でささやかれて、振り返ったと思ったら、覆面の男だったこ
とに、自分の不運さを呪ったことも、誰も責める人はいないと思っ
た。

思えば、生まれたときから運がなかった。
まず家族運がなかった。

父親も母親も、マリアを育てることからまず放棄した。

桜の下で泣いていたところを孤児院の院長に拾われたのだから、野犬に襲われなかっただけマシだったと思うことにしている。

そして、金運もなかった。

特別ないじめも特別な貧しさも感じずに孤児院に育てられていたのだが、中学二年のとき孤児院の経営が立ち行かなくなった。結局、行き場のない子供として他県の孤児院にいれられたが、対人運もなかったらしく、引き取ってくれるような里親もなく、高校を卒業したら孤児院を放り出された。

夜学の大学に通いながらバイトをする日々は、決して裕福ではなかったが、それなりにマリアは幸せをつかもうとしていたはずだった。

今日は、給料日だったのだ。

大学に行く前に銀行で金額を確かめ、更に言えば帰り道のコンビニでケーキの一つも買って食べたいなあというささやかな企みもあった。

それが、

「大人しくしてください」

穏やかな声とは裏腹に、男が手に持っている、日本ではおおよそ映画館でしかお目にかかれそうにない機関銃というやつが火を噴いた。

ズガガガガガガ！ と耳障りな音に悲鳴が混じった。

何が起こっているんだろう。

機関銃の牙が横断した窓口を見ても、マリアは悲鳴もあげられない。

なぜなら、マリアの口を塞いでいる男が、まさしく撃つたのだから。

覆面の男は街のチンピラにはない落ち着き払った様子で銃口をくいつと上げた。

すると、それを合図に二人の、同じく覆面の男たちが窓口には拳銃をつきつけ、用意していたらしいバッグを行員のお姉さんに差し出して金を詰めさせている。

マリアも他の客と同様に顔をひきつらせて、大人しくしているしかない。

やがて旅行用の鞆いっぱいには札束を詰め終えて、男二人が窓口から離れると、けたたましいベルの音が響き渡る。

非常ベルだ！

ニュースで何気なく見たことのある防犯訓練を思い出しながらマリアは、けたたましい音に光明を見出した。このベルで警察がかけつけてくるはずだ。マリアはそのうるさい音が僥倖に聞こえたが、マリアの口を塞いでいた男は彼女を放そうとはしなかった。

口を塞ぐのをやめたと思ったら、今度は腕を引っつかんで他の二人の男と一緒に走り出したのだ。

マリアを引きずって。

「う、嘘でしょ、おおおおおおおおおっっっっっ」

響けクレーム

マリアを引きずっていた男はうるさそうに彼女をみやったが、顔色を変えないまま（覆面をしているのだから当然だ）銀行の外へと走り出す。

一瞬、街頭は騒然となったが、男たちはたじろぎもしない。

引きずられていたマリアのすぐ後ろでは銀行の防犯シャッターが勢いよく閉じる。いよいよ逃げ道が無いようにも思えたが、彼らは銀行の裏道に止めてあった黒いバンへと各々を投げ込んだ。

座席に文字通り放り込まれたマリアは顔を窓に打ちつけそうにもなったが、腕を掴んでいた男が彼女の体をさっと抱きかかえた。

それと同時に、バンは急発進するので、マリアは男の腕から逃れる隙もなく倒れこむ。

だが、舌をかむのを覚悟してマリアは自分を抱きかかえている男の胸倉を逆に引っつかんだ。

「ちょっと！ 降ろしてよ！ お金が手に入ったんだから私は用なしでしょう！ アンタたちがどうなろうと私には関係ないんだから！」

胸倉を掴み上げられた男の方は、少し驚いたように顔をマリアに向けたが、

「黙ってないでなんとか……っ うわ！」

どこを走っているのかカーレースでしか使わないような車のドリフトで、マリアの体は横に吹っ飛びそうだ。またもや窓に体をぶつける寸前で、男がマリアを抱きかかえた。

「静かにしているんだね。Lady」

やたら発音の良い穏やかな声は、決してマリアに好意的ではない。それがわかっていたが、マリアは男に抱きこまれたまま口を開く。「喋れるなら初めからそうしなさいよこの木偶の坊！ こちとらアンタたちのドライブに付き合ってるヒマなんか一分一秒一ミクロン

もないのよ！ 大学行つてとつとレポート提出して講義受けたら次の深夜バイトが待ってんの！ 帰ったら速攻寝て朝っぱらからまたバイト！ 他人様の金使おうなんていうアンタたちと違って有難いお給料で生きてるまっとうな人間なのよ私は！ それにアンタたちの背格好や声なんか覚えてるヒマなんかあつたら英単語の一つも覚えるんだから、好きなだけお金持って逃げなさいよ私を置いて！」

急カーブを繰り返す車内は静まり返った。

ただ一人、マリアだけがぜえぜえと息切れしたまま男たちを睨みつけた。

急ブレーキの甲高い悲鳴だけが響く。

マリアを抱きかかえていた男は彼女の顔を見、それから声を出したと思えば早口でまくしたてた。

それはマリアに向けてというよりも、運転席と助手席の男に向かってのようだ。

英語ではない。

それだけはマリアにもわかった。

だから、

『せめて英語で話さないよ！』
と、言つてやる。

自慢ではないが前に居た孤児院の院長の方針で英語は日常会話レベルなら出来るのだ。

男たちは騒々しく走る車とは裏腹に一瞬、顔を見合わせる。

だがその静寂は本当に一瞬で、

『あっははははははははは！』

思い切り外人の軽快な笑い声が車中を埋めた。

マリアはぐつと奥歯を噛むように外人（覆面でわからないが）たちを精一杯に睨む。

『何笑つてんのよ！ 強盗！』

『わかってないな。レディ』

笑いをにじませたまま、穏やかな声が降って来る。マリアはすっかり忘れていたが、覆面の男に抱きかかえられているのだ。それはとても密着した状態で。

マリアは自分を抱え込むようにしている唐突に黒のタートルネックとチノパンがやたら肌触りの良い高そうなものだということが、瘦身に見えてやたらしつかりとした筋肉の胸板だとかにあたふたした。男女ごちゃまぜに育てられる孤児院で育ったマリアが初心を決め込むつもりはないが、バイトに学校と忙しくて彼氏も出来なくてこんな扱いに慣れていないのは仕方が無い。気が緩むと顔が赤くなるのを自覚しながら、マリアは叩いてもびくともしない男の体を押しつけた。が、またしても急ブレーキで「おっと」と男に抱えられてしまう。

『そうそう。大人しくしてなさい。レディ』

少し楽しげに言う男は、マリアが内心焦っていることをわかっているのだろう。それが悔しくてマリアは顔を上げる。予想外に覆面が近いが気にしない。

「だからアンタの言うことなんて……」

「極悪人を刺激するのは賢明な人間のすることじゃないな」

静かに、だが深い声音で男は日本語でそつと呟く。

マリアは言葉を無くして眉を歪ませた。

背筋がぞわりと栗立った。

初めて、マリアは男の得体の知れなさを感じた。

銀行強盗というだけではない。

それだけには留まらない、得体の知れない男。

覆面越しにも薄気味悪い男は、黙り込んだマリアの体を支えたまま。

男が嗤った気がした。

悔しくなった。

どうして、こんな強盗に怯えなくてはならない。

マリアには、一つも落ち度はないというのに。
顔をあげた。

羽交い絞めにされているといった方が良いでしょうが、
それでも決然と。

「アンタなんか怖くない」

悪党に説法

震えも怯えも、ましてや驕りも無くマリアは、はっきりと声をあげた。

またマリアを抱える男が覆面の中で笑った。

今度はそれとわかる溜息のような声が聞こえたのだ。

不審に思ったのは瞬きする間で、次にそれは驚きに変わった。

頬に銀色の髪がふわりとかった。

その肌が抜けるように白く見えるのは、黒ずくめの服のせいではない。

マリアを見下ろす双眸は、溶かし込んだような金色をしていた。

『おい！』

助手席の男が後部座席を振り返って叫んだ。

彼らにとつても、この男の行動は予想外だったようだ。

急ブレーキを踏み続ける車とは裏腹にゆっくりとマリアを飲み込む金色。

マリアは、腕を伸ばしていた。

そして、

「痛い！」

腹が立つほど白い頬をつねりあげる。

「……なんだ。本物の人間なんだ」

ほっと息をつく、マリアから頬を守るようにおさえて作り物めいた顔の男は喚いた。この男が、マリアを抱えていた男である。

「いったいなんだと思ったんだ！」

「あんまりにも嘘くさいから作り物かと思って」

一瞬でもこんな男に怯えたのは間違いだったとマリアは結論づける。

「人肌の温もりがあつて良かった」

「……………」

強盗であるはずの男は、心底不思議なパンダでも見るような目つきでマリアを見た。

覆面が取られた今となつては表情がよくわかる。

少し伸びた前髪のプラチナブロンド、そして人の目を奪う深い黄金の瞳。

一見して人形のようなだが、その双眸には射抜くような光を湛えている。

まさか人形に抱きかかえられていたのかと背筋が冷えたが人間だとわかった、どうにかなりそうだとマリアは思った。

「放してよ」

いつのまにか車はどこかに止まっている。

けれど、見た目に派手な男は一向にマリアを解放しようとはしなかった。

答えといわんばかりに、その人形のような顔が不意に生氣を得たように微笑んだのだ。

そうしてマリアを車の外に引つ張り出す。

マリアは不承不承地面に足をつけて立つが、瘦身のどこにそんな力があるのかと思うほど力強く、男に手を握られたままだ。

同じように車から降りたらしい他の男たちも、戦利品を持って歩き出す。

その先を見とめてマリアは絶句した。

セスナ機だ。

小型だが、それでも二十人程度なら乗り込めそうな。

まさか空港とは思わなかった。

周りに人はいない。

マリアは改めて男の手から逃れようともがいた。

「放してよ！ 私はもう要らないでしょう！」

だが、男はもがくマリアの手を不意に引つ張った。

唐突だったため、マリアは男の胸へと再び倒れこんでしまう。
待ち構えた男は、したり顔でマリアの耳元へと唇をよせる。

「放さない」

ぞわりと背筋が粟立った。

「なっ……」

「今日の僕の収穫が、君だからだ」

思わず絶句するマリアをさも楽しげに男は見つめ、

「泥棒が、自分の獲物を置いて逃げるはずがないだろう？」

動けないマリアの体を軽々と抱き上げた。

セスナは既に離着準備を整えているようで、エンジンの轟音が鳴り響く。

ごうごうと風を目の当たりにして、マリアはようやく声を張り上げた。

「放せっ！ 人攫いっつつっっ！」

…泥棒に説法だと誰に言われなくても、わかっているつもりだ。身をもって。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8276k/>

怪盗と私

2010年10月20日18時12分発行